

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 支援 - 14

学校名・団体名	白石市立南中学校
HPアドレス	http://shirominami-j.shiroishi-c.ed.jp/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	自己肯定感を育てる学校づくり ～学校統合を乗り越えて～

〈活動・研究の意義、目的〉

本校が位置する宮城県白石市越河・斎川地区は東日本大震災による福島原発被災の影響で放射線量が高く、除染基準の4倍を、場所によってはそれをはるかに超え、校地内での生徒の活動が制限されてきた。グラウンドは除染作業が続き、本校に隣接し市内を見渡す名所ともなっていた「風の丘」も出入りが禁止された。また、少子高齢化の影響から児童生徒の減少傾向が見られた地域ではあったが、放射能の影響で減少傾向に拍車がかかったことは否めず、地域の斎川小学校は今年度末に閉校、本校も30年度末に閉校し、白石中学校に統合されることとなった。

自己肯定感が低く、ともすると受身になりがちな全校生徒33名の心に自信をもたせ、自ら未来を切り開いていこうとするエネルギーに変えるべく、本校では「こころの教育」「地域を愛する教育」に全職員で取り組んでいる。「学ぶ意欲を持ち、自ら学び続ける生徒の育成」を目指し、自己の変容を実感し、積極的に社会に関わろうとする生徒を育てることで、閉校となって以降も、生徒の心に愛校心や地域への感謝の念を根付かせることにつながるのではないかと、さらには小規模校ならではの一人一人の生徒に行き届いた本校の教育実践を発信することで、県内、また、全国の同様の状況にある生徒たちを勇気付けることになるものと考えた。

活動報告

【全職員での授業づくり, 小中高大をつなぐ授業づくり】

本校の授業づくりをきっかけに、県内外の多くの教員がつながり、学校教育での学びについて考えることができた。研究会では、小学校、中学校、高校、大学の教員が本校に集まり、意見交換をしたり、考えを交流し合ったり、これまでにはない新たな視点をもった研修を行うことができた。また、県外視察では、先進的な取り組みをしている学校を視察し、研修で得たことを本校の実践に生かしてきた。これらの研究活動は、東日本大震災以降、多くの教育課題を抱える宮城県内の教育復興に寄与し、具体的な実践として役立つものであったと感じている。

1 研修会の実施

(1) 「第1回 自己の変容を実感できる授業目指す研究フォーラム」の実施

本校の「協同学習」の手法を取り入れた授業実践を公開し、参加された県内の小中高の先生方と授業づくりについて研究協議を行った。また、中京大学の杉江修治教授より、本校の授業づくりについての助言や「協同学習で進めるアクティブな学び」と題した講演をいただいた。

日にち：平成29年7月14日(金)

講師：中京大学 国際教養学部 教授 杉江修治 先生

内容：3学年数学の授業公開と授業検討、講演

《参加者の感想から》

- 中学校の授業に大変興味があった。生徒が自分の考えをしっかりと持ち話し合い、わからない時ははっきり相手に伝え、説明を聞こうとしていた。学び合いの姿だなあと感じた。(小学校)
- 中学校数学という他校種、他教科の授業ということでとても興味深く拝見した。少人数でもあり、丁寧な授業運びで生徒が落ち着いて考え、話していたことが印象的だった。(高校)
- 研究協議で小中の先生方と話ができたことは大変有意義だった。時間をもっとほしかった。(高校)
- 講義をきき、自ら学ぶ姿がどのようなものか、はっきりイメージすることができた。(小学校)
- これだけ多くの先生方が南中学校を訪れたこと、南中学校への期待だと思えます。先生・生徒たちの頑張る姿に胸が熱くなりました。(高等学校)
- 自分の考えを自分の言葉で伝える生徒が多くて驚いた。自分の授業改善に生かしたい。(中学校)

(2) 「自己の変容を実感できる授業目指す音楽科授業研究会」の実施

2年生の鑑賞の授業を公開し、講師に迎えた仙台向山高校の水口俊彦校長先生より多くの助言をいただいた。また、3年生を対象にした水口校長先生による歌唱の授業が行われ、生徒は音楽の作り方や表現を深めることができた。

日にち：平成29年11月6日(月)

講師：宮城県仙台向山高等学校 校長 水口俊彦 先生

内容：2学年音楽の授業公開、講師による3学年生徒への歌唱指導、授業検討、講演

《参加者の感想から》

- 新しい聴かせ方を知った。今日の授業を参考にして、自分の授業を組み立ててみたい。(中学校)
- 鑑賞に答えはないという声掛けが様々な気付きにつながっていた。生徒が気付いた視点で2回目の鑑賞をしてみて「なるほど、ここか。」と思う部分が多々あった。(小学校)
- 日頃、歌えた、演奏できたで満足してしまっていたが、音の響きや休符の意図など、考えてから歌うことで表現が変わることに気付いた。(小学校)
- AIが何でもできるようになるだろうという時代だが、人間ならではの心や感じ取る力を育てていきたいと思った。(小学校)
- 音楽を切り口として、どの教科にも通じるお話をいただいた。多くの先生方に音楽という教科のキャパシティと幅の広さを分かっていただくよい機会となった。(中学校)

(3) 「第2回 自己の変容を実感できる授業目指す研究フォーラム」の実施

県内から多くの小中高の先生方が参加し、互いに学びを深める研修となった。県外先進校(岐阜県土岐市立泉中学校、石川県小松市立国府中学校)視察報告の後、「小中高大の連携を通じた魅力的な校内研究の在り方」をテーマにしたパネルディスカッションを実施した。また、中京大学の杉江修治教授に「効果的な学びをどう作るかー教師の協働を通して気付きあう」をテーマにご講演いただいた。

日にち：平成30年2月22日(木)

講師：中京大学教授 杉江修治 先生

内容：県外先進校視察報告、パネルディスカッション、講演

コーディネーター 宮城学院女子大学一般教育部 准教授 木村 春美 氏
 パネリスト 宮城県仙台第一高等学校 教諭 永原 啓嗣 氏
 白石市立白石第一小学校 教諭 清末 泰成 氏
 株式会社ベネッセコーポレーション東北支社 三船 紘康 氏
 白石市立南中学校 教諭 熊谷 みち

《 参加者の感想から 》

- 小中高大と、それぞれの立場から話を聞くことができ、大変勉強になった。校種を超えて「どんな人間を社会に送り出すか」という観点をもつべきだということが最も印象に残った。(小学校)
- 他校種の先生の話聞くことができ、勉強になった。高校も小中と同様だと思ふことがあった。(高校)協同学習を自ら体験することで、少し生徒の気持ちに共感をもてた。仲良しクラスではなく、お互いを高め合うクラスを目指すべきだという杉江先生の言葉が印象的だった。(中学校)
- 課題が明確だと、人は素直に話し合うことができる。自分の意見を素直に話す、他者の話をしっかりと聞くという行為を実際に体験できとても興味深かった。教室でも実践してみたいと思う。大切なのは指導観の共有化と向上する集団作りであると感じた。(高校)

【 郷土を愛する地域発信プロジェクト(白石和紙づくり) 】

白石和紙は、「枕草子」や「源氏物語」にも紹介され「ふくよかに、清く、麗しく、気品のある格調高い紙」と評された「みちのく紙」の流れをくむ紙で、原料生産から仕上げまで一貫して地元で手掛けるのが特徴である。現在、商業産業としての生産は終了し、紙を漉く職人はいなくなってしまうが、技術の継承に取り組み、宮城県の特別表彰用紙等の製作を請け負っている市内のまちづくりサークルの皆さんに協力していただいて、2学年の生徒一人一人が白石和紙による自分の卒業証書づくりに取り組んだ。東日本大震災当時は放射線量が高く、土の入れ替えや生徒の活動制限などがあった校地内に、白石和紙原料となるトラフコウゾと紙漉きに欠くことのできないトロロアオイを栽培し、伝統的な製法と製紙用具を用いての和紙づくりのすべての工程を体験した。

故郷の歴史を学び、白石の自然と受け継がれてきた製法にこだわって「世界でたった一枚の私の卒業証書」を作り上げた。将来、生徒たちはこの卒業証書を見て、南中学校で一緒に過ごした仲間たちや支えてくれた地域の方々を思い出すであろう。この活動は、故郷を愛し、未曾有の大震災からの復興を担う人材育成に大きくかかわるものとなった。

(1) 目的

- ① 白石和紙を作る工程を実際に体験することで、白石の伝統文化に対する理解を深め、ふるさとを愛し、白石に育ったことを誇りに思う生徒を育てる。
- ② 伝統文化と歴史を未来につなげようと尽力する方々と一緒に活動することで、将来、積極的に地域に関わろうとする生徒を育てる。
- ③ 様々な作業に携わりながら、一人一人が中学校での思い出を詰め込んだ卒業証書用の紙を作る。

(2) 内容

- ① 白石和紙の歴史、特長、製作工程についての講話とワークショップ
- ② 楮収穫、楮蒸し、楮皮引き
- ③ 草煮、ちりより、草打ち、ざぶり
- ④ 紙漉き
- ⑤ 紙干しと仕上げ
- ⑥ (3) 講師 白石和紙 蔵富人 の皆様

2018年(平成30年)2月24日(土曜日) みやぎ C (1)



平成30年2月24日 河北新報の記事より

《 生徒の感想から 》

- いちばん印象に残っているのは、楮を叩いて繊維をほぐす作業。紙漉きは簡単そうだと思っていたが、型枠は重く、揺するタイミングも難しかった。
- 水が冷たくて大変だったが、良い紙ができてよかった。この伝統を忘れずに、しっかり白石の伝統を大切にしていきたい。
- 紙ができるまでにたくさんの作業があって、一つ一つが大切だと感じた。来年、自分で漉いた卒業証書もらうのが楽しみで嬉しい。
- 育てて刈りとった楮がこうやって紙になるということが分かった。昔の人は、手間をかけて紙を作っていたのだと思った。
- 和紙を持った感じがすごく軽くて、柔らかい感じがした。石の伝統が続くといいと思った。